

GATHERING UP

時と場を分かち合うリビング

PROJECT 大正大学15号館 地域構想研究所

ひとつのテーブルを囲み食事を共にすることは、共同生活の第一歩であると思う。

寝食を共にすることは大切な時間を共有することに他ならないからだ。

大正大学15号館 地域構想研究所は地方に住んでいた若者が、地方創生に貢献できる未来のリーダーを目指し、大学生活の始まりと同時に一つ屋根の下に集まって共同生活を送るための学生寮である。

個人のプライベートを重視するワンルーム形式とするのではなく、リビング、ダイニングや水廻りを共有するシェアハウス形式とすることで、学生同士が時間を共有し、絆が深まることを意図した。この場所で育まれた学生同士の連帯感や仲間意識が、各地方の創生に活かされることを期待している。





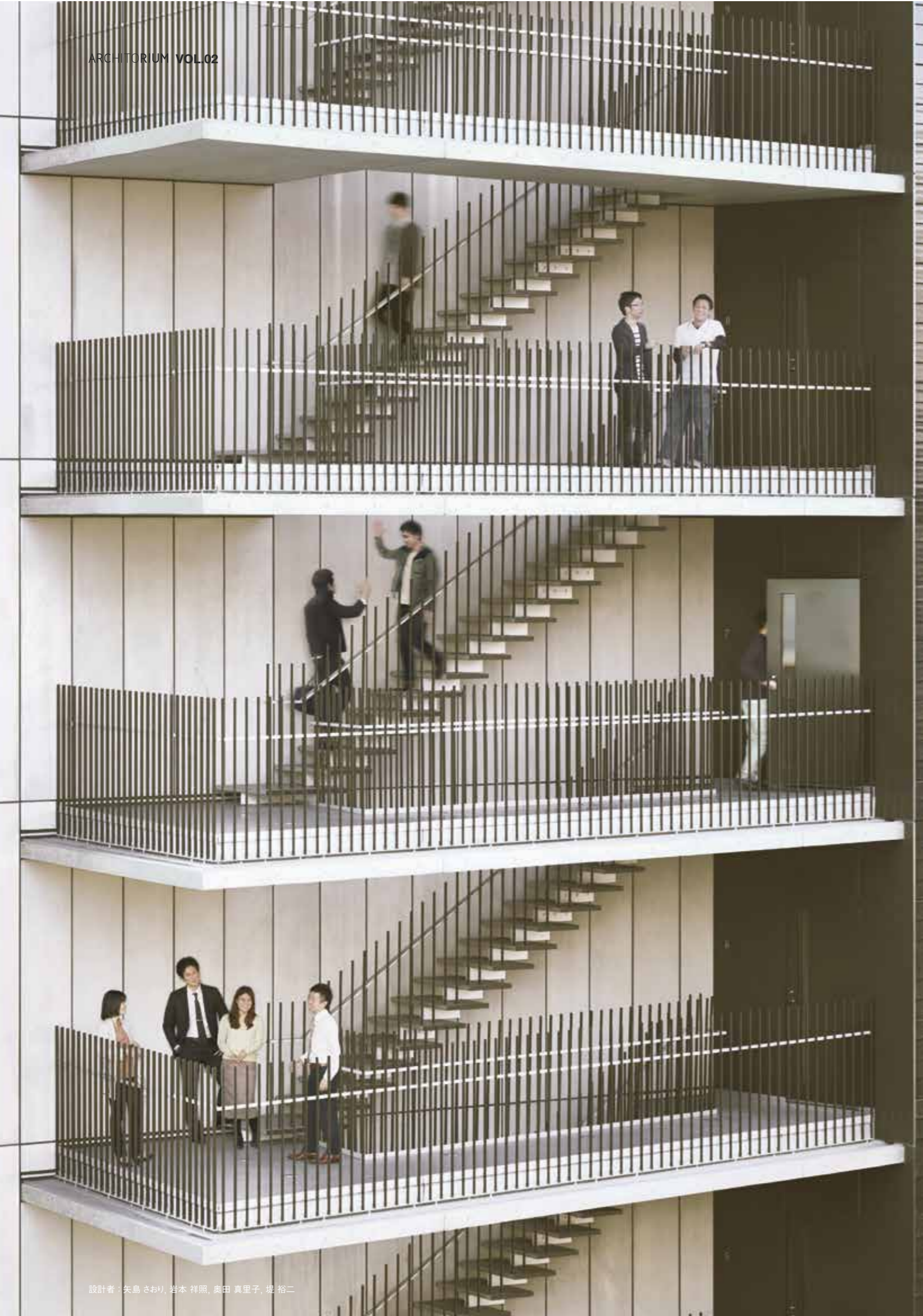
居心地の良さが絆を深める

1つのフロアは、中央に配置されたLDKとそれを取り囲む8人分の寝室となっている。学生たちはくつろぎ、食事をし、調理をするLDKを共有する。即ち、共同生活を通じて主体性や協調性を養える実践の場となる。多くの時間を共に過ごすことで、学生同士が密な関係を築ける空間となることを意図している。

生活の中心の場は、共にくつろぎ集うために、長居したくなるような居心地の良さが必要である。狭すぎず広すぎないスペースに正方形のテーブルと8人分の椅子を配置。心地よい距離感で会話や食事が楽しめるよう配慮を行った。

リビングと各寝室の間には一間の奥行きがあるプライベート棚を設けた。各個人用の棚によるバッファゾーンを介して、パブリックとプライベートを緩やかにつなげている。個人の棚に置かれた私物が自然に視野に入ってくることから、棚そのものが個性の表現の場となっている。





人の繋がりが地域の繋がりに

各フロアの主動線は外部の階段となっている。上下階を移動する単純な動線としての機能しか持たないミニマムな階段ではなく、街並みを見下ろしながら滞在できる時間を生むよう、空間に余裕を持たせている。移動する学生同士は、ただすれ違うだけではなく、偶然の出会いから立ち止まって気軽に立ち話ができるようになっている。この階段により、5フロア積層した学生寮は1フロア8人で完結するのではなくフロアを越えて40人のつながりとなる。また、より静かで快適な環境とするため、道路側に窓を設けず力強い壁面とスラブの外観とした。

また、低層部分には地域構想を研究する場として、研究ラウンジが配置されている。階段は「地方創生に貢献できる未来のリーダーを育成する場」としての学生寮と「地域への課題に積極的に取り組み、地域連携のプラットフォームとなる研究の場」としての研究ラウンジをつなぐ役割も果たす。

各地方から集まる学生のための寮と、地域構想を研究する場が一体となって相乗効果を生み出すこの場所が、幸せな人のつながり、地域のつながりを生み出し、地方創生へ貢献していくリーダーを生み出すことを期待している。